

全国ミニバスケットボール大会の状況を小林理事長から報告いただきましたので掲載します。

「友情・ほほえみ・フェアプレー」全国ミニバスケットボール大会を参観して

北海道ミニバスケットボール連盟
理事長 小林 勉

3月28日から30日の3日間、東京代々木体育館にて開催された「全国ミニバスケットボール(以下、「ミニバス」という。)大会」。北海道からは、先の北海道大会を制した男子江別、女子美しが丘の両チームが北海道から推薦され出場した。

この大会期間中は、全国常任理事会や全国理事会が開催されることから、北海道ブロック常任理事である私は就任以来足を運んでいる。

各種打ち合わせやスポンサーとの調整等、中々ゆっくり試合を観戦することができないことが多かったが、この度のご指名により久しぶりに全国大会を観戦することに主眼を置いた。

開会式の席上では、各都道府県において永年に亘りミニバスの普及発展に寄与された方の功績を讃えた日本ミニバスケットボール連盟表彰が行われ、北海道から当連盟の前会長である古賀敏勝氏を含めた3名が受賞。

また、今回は、第40回という周年記念大会となったため、JBL から各チーム1名の選手、女子は全日本の大神選手を始めとした3名が開会式に出席し、参観者との握手会を行う等大会に花を添え、出だしから盛り上がりを見せたこの度の全国大会。今回のレポートでは、大会の様に加え、この機会に、大会の歴史的経緯にも触れてみたい。

40回目を迎えた全国大会。振り返ると15回までは交歓大会として全国各地で開催し、23回までは優勝大会(俗に言う日本一決定。代々木体育館開催が定着)、以後、今日まではブロック優勝制度(優勝が4チーム)となっている。

変革の理由は様々であるが、ミニバスに携わる方々に今一度考えていただきたいのが、「なぜ、優勝大会から現行の制度になったのか」というところである。

その大きな理由の一つに、「教育スポーツ(中学以降は競技スポーツ)であるミニバスから勝利至上主義の排除」と「保護者の経費軽減」がある。

日本一を決定していた優勝大会時代は、大会期間だけで4日間、その前日入りとすると計5日間となる。

「勝利(優勝)」のために、数日前から乗り込むと約1週間以上という長丁場にもなるチームがあり、関東近郊のチームでさえ300万以上の経費をかけて大会に望んだという話もあるほどであった。

この膨大な経費は、原則全て保護者の負担である。寄付や補助金等もあろうが、やはり負

担の大きさは家庭において厳しいものがある。

また、「優勝(または全国出場)」を目指すにあたり、多くの児童をチームに集めるため、複数、しかも、10校にもおよぶ学校から募集をかけるといった現象が日本各地で起こった。チームの成り立ちを考えると学校単位で始まったもの、地域の社会体育から始まったもの、市町村といった広域クラブ(ミニバス教室等)から始まったものなど様々であり指導者がいない等の理由もあって複数学校が必ずしも問題があるとは言えないものの、多くの児童を集めるといった現状によって、「試合どころかベンチにも入ることができない」という現実があった。

同時に、勝利のための練習に次ぐ練習、大会、練習試合と休む暇が無い過酷な日程そして厳しい指導。日本ミニバスケットボール連盟に数々の苦情、相談が有り、その度に実態調査を実施し指導にあたってきたが依然として後を絶たず、これらの打破のための方策として、チーム構成の基本的な考え方(より多くの児童が試合に出られる環境づくりに対しての具体的な環境作り等)、暴力暴言の完全排除、全国大会におけるチーム規定及び日程の短縮等が全国に示されたのが平成9年であった。

10年の月日が流れ、その間、市町村合併の推進、児童数減による学校の統廃合、以前は無かった「ミニバス塾問題(広域で形成し高額な授業料を徴収)」が新たに発生する等、ミニバス取り巻く環境は激変している。

チーム構成を含めた各種ルールは見直しの時期に来ていることは日本ミニ連でも承知しており、現在、時代に適応したものを検討している。

しかし、ミニバスの基本精神である、「友情・ほほえみ・フェアプレー」に変化は無く、これは選手だけではなく、我々指導者が肝に銘じる言葉であることを再認識していただきたい。

生涯スポーツの第一歩として「ミニバス」を選んだ子供たちがスポーツを通じて様々なことを学び、それが、バスケットボールに繋がることを願いながら、指導にあたらなくてはならないのである。

日本ミニ連では現在、U-12といった選抜形式の取り組みはなされていない。一部の子供たちだけを強化するのではなく、限らない可能性を持った子供たちに正しい技術指導を行うことに主眼をおいているため、指導者の育成に力を入れているからである。

これに対し異論もあろうかと思うが、北海道としても互いに歩み寄りながら、よりバスケットを好きになり、よりレベルアップを図るべく方策を見出していきたい。

さて、肝心の全国の模様である。全国大会の競技期間は3日間で2日目半ばまでは3チーム総当りの予選が行われ、その後、決勝トーナメントが2試合行われることになっている。予選が終わるまでは代々木第一体育館で5コート、第二体育館で2コート、計7コートとなることから、かなり手狭な感がある。事実、1コートのサイズが24×13mであり、エンドラインも30cm切り上げられているため、バックボードとの広さも異なる等、正規の企画28×15mと比較すると展開を大きく左右するだけの影響がある。

全国各地では小学校体育館自体もミニバスギリギリの大きさが大半で、東北・北海道のような体育館の大きさは無いため、大会ではコートに慣れるまでが一苦勞である。

北海道代表の両チームもやはりこのコートに苦戦していたようで、特に男子江別は、ブレイク、1対1といったスペースの有効利用による展開を主としているため、ブレイクを止められた後のセットの展開になると切り崩してもヘルプが早いため、苦しいシュートやパスになることから自分たちのペースに持ち込むのが困難であった。

初日、江別は福岡代表とはペースに乗れず55-32で敗れはしたが、その福岡も江別戦の

前に島根県代表に52-50の1ゴール差で敗れるという混戦模様。

私が観戦した江別と島根県代表との試合では、前半、ミスマッチを確実にものにし、点差を広げたが後半、相手の高さに思うように得点が伸びず、追いつかれ、引き離すという展開。江別が勝ち上がるためには少なくとも25点以上をつけて勝つことが条件であったが、終始シーソーゲームは変わらず、35-33で勝利したものの3チームが1勝1敗でゴールアベレージにより、福岡県代表が決勝トーナメントに進んだ。

福岡代表との試合は会議のため、観戦することはできなかったが、島根県との試合での印象として、やはり慣れない会場の雰囲気ですぐ自分たちのペースを掴むことで江別が先手を取った感があった。島根は全体的に、体が中学生並みにがっちりしたチームで、足がしっかりとできていた。特にサイドステップの寄りには目を見張るものがあり、ファールトラブルにならないよう、俗に言う余計な手を使わず、コースに回りこむその足は見事であった。また、男子の全体的な印象として、江別の選手がよく試合で見せるワイドなインサイドアウトをダブルドリブルにならない範囲で巧みに操っていた。この大会では高身長選手は少なかったが、随所に目に付いたのはインサイドにおけるミートの上手さであった。

ハイポストでは単純シールではなく、ターゲットハンド側に一步ミートして半身にゴールに構え、トリプルスレッドポジションからゴール下、外郭へのパス、または1対1等オフENSEの基点としたプレーが目立った。キャッチもダイレクトに両手ではなく、ターゲットハンド、オフハンドの順でキャッチする、または、ミートから突き出しの足の方の手でドリブルを突き出すといった U-12ドリルが普及している印象を残した。

当連盟では、札幌地区で1回、札幌以外の地区で2回このエンデバードリルを指導者対象に講習会を行っている。得てして指導者は自分のバスケットボールの経験を教える傾向にあるが、やはり、別観点から今一度見つめなおすためにも、指導方法を学ぶ機会を増やし、いわゆる指導者の引き出しの数を増やすことの重要性を感じた。

女子美しが丘は、初戦の山梨県代表との試合は主力にファールがかさみ34-43で、2試合目はシーソーゲームであったが、42-46で岡山県代表に惜敗し予選敗退となった。実力的には引けをとらないだけに悔しさが残る試合であった。山梨県と岡山県は61-34で山梨県が制し勝ち上がりを決めた。

結果的に、男子は江別を破った福岡県代表がブロック準優勝。優勝は東京都、宮城県、広島県、大分県。女子は、山梨県はブロック準優勝で、優勝は、愛媛県、東京都、愛知県、兵庫県であった。

全体的には、かつての一極集中ではなく全国的に混戦模様であり、どの都道府県も十分チャンスがあるように思えた。

いくつか提言をするならば、勝ち上がるチームは厳しいジャッジに耐えうるタイトなディフェンスとセカンドチャンスを与えないリバウンドを含めたルーズボールの強さがある。そのためには、平面と立面のスペースの認識と基本であるボックスアウトの徹底。また、中々できないことだが、やはり声を出し、全員バスケットの意識を持たせることである。

基本的なドリルを周知させることは当然だが、ミニバスでは生活態度、感謝の気持ち、そしてチームの意義をしっかり指導することが大切であると再確認した。これらのことを踏まえ、当連盟では今後、効果的な講習会の開催を検討していくことを結びにして今回のレポートを終えたい。